みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

遊牧がモンゴル経済を変える日

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4581

Ⅲ部

環境を保全する経済への挑み

モンゴルにおいて、遊牧を経済システムのなかに組み込んで成立させることは、環境保全型の経済を創り出すことに等しい。しかし、遊牧だけがすべてではない。たとえば、草原における遊牧民の暮らしや野生動物に焦点をあてた観光もまた、環境保全型経済の一つの試みと言えよう。

第Ⅲ部では、森林保全に焦点をあてた専論を用意することができた。この問題は、いまだ解決されているわけではなく、また、解決のための決定的な施策が実施されているわけでもない。

ただし、モンゴル人自身のなかにすでに環境保全型経済への模索があることを知ることはきわめて重要であろう。なぜなら、世界はまさしく同時に進んでいることを私たちに教えてくれるからである。環境保全型経済への模索という点で、たとえば京都議定書を無視するアメリカはむしろ後進国であると言ってよいかもしれない。

世界は、同時に努力しなければならないことを私たちは知るだろう。

第5章
モンゴルにおける森林資源の持続可能な管理

ウラムバヤル・トンガラク

1　モンゴル政府のこれまでの取り組み

モンゴルにおける森林管理は、一九九二年の新憲法および環境保護法に明示された原則に従っている。これらの法令において明記されているように、すべての森林はモンゴル国有である。

民主化以降、ほかのすべての政策と同様に、森林管理に関しても法律と政策は頻繁に見直されてきた。一九九五年に承認された新しいモンゴルの森林法では、森林の管理を決定するための法的な枠組みが規定され、森林資源の保護、乱伐の禁止、年間伐木の規定割当量の制定、森林再生の条項に重点が置かれている。

このように法環境は比較的改善されたにもかかわらず、森林のエコシステムを傷つける、

業者による法律違反はきわめて多い。たとえば、モンゴル自然環境省（ＭＮＥ）の環境保護庁によれば、一九九六年から二〇〇〇年のあいだ、五万一二二四件もの違法行為が発見されたという。すなわち、法の効力が少ないことを示している。その理由として、一般的に環境意識が乏しいこと、森林教育の施設などが不十分であることがあげられる。また、森林管理セクターでは、森林警備隊や監察官の給料がささやかであり、やる気に乏しいこと、必要な資料や十分な装備がないこと、たとえば地図さえ持っていないことなど、行政上の欠陥もあげられよう。

民主化以降、森林管理の行政は部分的に地方へ分権化されてきた。自然環境省は環境保護庁を通じて、森林政策を調整し、自治的な仕事を指揮し、技術援助を提供している。自然環境省の下部機関である森林管理センターは、森林を調査し、その資源リストを作成し、加えて全国の森林管理プランを開発している。

これに対して地方政府は、与えられた割当量の範囲内での伐採を許可すると同時に、環境監察事務所を通して法の遵守を遂行させるべく法的監督を行っている。限られた予算と専門家の不足に悩まされながらも、許可発行と監察実施のための権限を与えられることによって、地方政府は伐採許可による収入をあげはじめたようである。

伐採を収入源としている地方行政府は、実際に伐採された地区、加工された材木の量、

植林地に関する最終結果記録について、中央政府に報告をしていない。そのことが、明らかに国レベルでの現実的なプランづくりに支障をきたしている。[1]

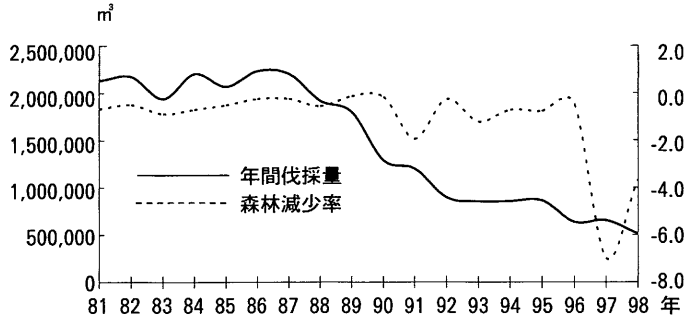
モンゴルの森林資源に対する適切な管理について、学術的な方法はいまのところ確立されていない。伐採技術は、ロシアで開発された大規模なシステムから応用されており、すでにそれらは十分に時代遅れであり、木材の四〇％を無駄にしていると言われている。[2] ドイツの森林管理の専門官が確認したように、生態学的に健全な森林管理は、そのような旧式な方法では実行不可能である。[3]

2　森林資源の衰退

大きな国有工場の崩壊に続いて、産業用木材の需要が低下したことにより、政府は実質的に年間の伐採許可量を減らしている。にもかかわらず、乱伐は進んでいる。そして、乱伐行為にともなう頻繁な火災の発生によって、森林は急激に減少しているとみられている（図1・2）。

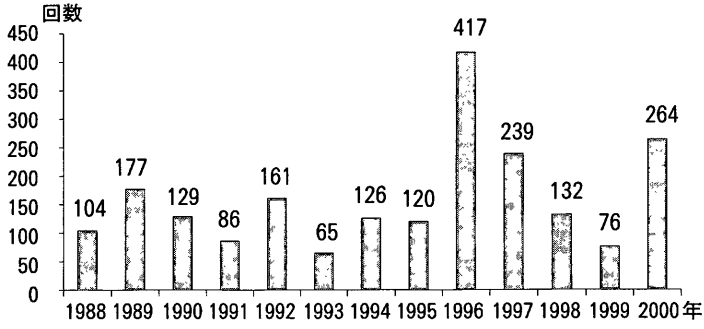
したがって、事実上、伐採許可量の削減は、十分な森林のリハビリテーションと植林活動なしでは、森林保全に大きな影響をもたない、と言えよう。

図1　年間伐採量と森林減少率



（出所）森林マネージメントセンター

図2　森林と草原における火災の発生回数



（出所）1999年環境状況および、消防局による1999-2000年のあいだに発生した森林と草原における火災に関する調査より作成

表1　森林のリハビリテーションの年間政府予算

年	1995	1996	1997	1998	1999*	2000	2001	2002
トゥグルグ（百万）	115	128	196	240	290	*560*	*600*	*668.2*

＊ウネン紙より概算して利用
（出所）Biological diversity
（イタリック体数字 出所）Munhtuya.B. (2002, January 25). The Unen newspaper

行なう　モンゴル自然環境省の国土保全局による結論[4]からすると、政府は相当な予算を森林のリハビリテーションに配分しているにもかかわらず、実際にリハビリテーションが行われている地域は増えていない。たとえば、最近八年のあいだ、リハビリテーションの年間予算配分は、年平均伸び率は三一％で、一億一五〇〇万トゥグルグから六億七〇〇〇万トゥグルグへ膨れあがっている（**表1**）。

この研究によって明らかにされたように、植林活動の増加傾向にもかかわらず、植林された苗木の半数以下しか育っていない。この失敗は、乾燥、火災、家畜、苗木の植えつけ方法の不適切などによって説明されるだろう[5]。

国有の木材加工会社が崩壊したことによって、人口の大半が木材に関係した活動に従事していた町では、失業が急増したことは言うまでもない。そのために、人びとが貧困に陥ったことは、多くの違法な伐採をまねいている。たとえば、GTZ（ドイツ技術協力公社）に資金提供をされている「緩衝地帯プロジェクト」の実施にあたって、旧国有材木工場のあったドラーンハーンの町からやってきた貧しい人びとは、家族を食

べさせるためには彼らの伐木技術でもって盗みをしなければならないと告白した。市場活動に関する記録と町への入境チェックが不十分なため、このような違法行動の全貌を明らかにすることは難しい。この点に関連して、個人のノコギリ所有が増加していることを指摘しておきたい。環境保護庁の報告によれば、一九九六年には国全体で七六の丸鋸（まるのこ）が登録されていた。この数字は二〇〇〇年には四三一にまで増加した。さらに二〇〇二年一月二六日からモンゴル自然環境省と警察が共同で行ったぬきうち調査では、捜査開始とともに、違法伐採の木材を運ぶ二〇から三〇のトラックが夜間に町へ入ってきたことが発見された[6]。このような極端なうごきは、全国平均よりずっと高い人口密度をもつ都市部において、冬のあいだ薪の需要が高いことから説明することができる。

総じて言えば、予算不足、専門家不足、旧式の技術、不十分な火災予防対策、いくつかの不適切な規制といった限界があるうえに、貧困、失業、地方の人口移動といった広範な社会経済的な要素によって、森林自然が影響を受けているのである。

3　経済成長と環境保護の両立に向けて

一部の地域を除いて、ほとんどの地方では市場経済と接合されていない。そのために、

生活を維持できなくなった人びとが都市部に向かい、激しい人口流入が起きている。ここ数年のゾドや旱魃の被害も大きく影響して、そうした人口移動の勢いはとどまることがない。そして、この都市人口の急激な増加こそは、周囲の森林に対して抗しがたい負担をかけ続けている。

このような人口密度の高い地域における森林破壊は、相互に依存した要因の複合によって発生している、とみてよいだろう。

供給サイドにある限界も森林への集中した負担の原因になっている。たとえば、道路が不十分なためにアクセスが限られており、またたとえば、傾斜の激しい場所では伐採することが技術的に難しい。つまり、結果的に到達可能な森林において過重な切り出しをもたらしている。

九〇年代後半、地方から都市への人口移動は、市場、仕事口、教育を求めて始まった。これにともなって、薪の伐採や松の実の採集など森林に対する人間の干渉が拡大した。この拡大は、実質的に森林火災を増加させ、モンゴルにおける森林破壊の主要な要因の一つになっている。

先の**図2**は一九八八年から一三年間の、森林と草原における火災の頻度を示している。後半の六年間の平均火災発生頻度二〇八件は、前半の七年間の平均一二一件から七二％も

表2　2000年に発生した火災の原因に関する調査

No.	原　　因	発生回数
1	ハンターによるキャンプの火、およびその他の森林への訪問者	91
2	タバコの火	52
3	伝統的なかまどで若木を燃やしたさいの火花	8
4	わら	7
5	トラック、トラクターによる火花	10
6	マッチのポイ捨て	22
7	ゴミの燃焼	1
8	防火帯の延焼	1
9	*雷をともなった嵐*	*17*
10	ロシアから延焼	17
11	中国から延焼	1
12	原因不明	35
13	調査中	2
	合計	264

(出所) Survey on Forest and Steppe Fires occurred between 1990–2000 by Fire Department

増加している。この傾向は、先に述べた人間の干渉のほかに、近年の温暖化傾向および旱魃など多くの要因によってもたらされているのだろう。

モンゴル、フィンランド、日本の専門家による調査の結果は、モンゴルにおける火災の九〇%が人間の活動が原因によるものだとしている。(7) この結論は、二〇〇〇年における森林と草原火災の原因についての、消防局による調査結果からも確認される（**表2**）。

二〇〇〇年に発生した合計二六四件の火災のうち、原因の明らかな二二七件についてみると、雷と

ロシア・中国からの延焼を除く八五％が人間の不注意によることがわかる。これらの火災の生態学的かつ経済的損失は莫大である。一九九六年から二〇〇〇年のあいだに発生した一一二八件の火災によるモンゴルの経済的な損失は一六〇億トゥグルグにのぼった。

森林破壊に関してもう一つ検討されなければならないことは、拡大するエネルギー消費についてである。モンゴル環境保護庁のレポートによれば、伐採された木材の七八％が薪として消費されている。この事実は、一年中薪の需要があるに等しいことを意味している。実質的には、薪の需要は寒くなる九月から四月終わりにかけて高まるが、日常的な煮炊きなどのエネルギー資源としても、石炭と家畜の糞に代わって、木材が利用されている地域もある。

森林はそもそも公共の所有であるため、人びとによる資源管理の意識はあまり高くない。とくに森林や森林の産物に直接かかわろうとする人びとは、森林によってもたらされる全体的な経済的かつ生態学的価値を過小評価している。これは国境における木材の不経済な伐採の仕方から始まり、無用な木材の貿易にいたるまで、さまざまなかたちになってあらわれている。伐採された木材の四〇％が加工のあいだに無駄になるので、森林地域の一人当たりの消費は高く、[8] 世界の発展途上国の平均値の五倍にもあたり、[9] いかにも不経済であることが明らかである。

さらに、輸出される材木は、世界市場価格より二〜三割も安く、国際的な市場活動に対してまったく知識をもちあわせていないと言わざるをえない。と同時に、これはまた、森林の産物に対する過小評価が災いしていることをもあらわしている。値札のついていない森林の価値に対して、このような市場の誤った要素は政府の政策によって調整されるべきであろう。しかしながら、政府が回収する森林の利用料は低すぎるし、伐採する業者も法を遵守しないため、社会全体としては森林資源を最善に利用するのではなく、無駄に使ってしまう傾向がある。したがって、企業が利益をあげる一方で、政府の設定した料金では森林の保全に有効な管理を促すことにはなっていない。

すべての産業分野において、大規模な国有企業の崩壊による多くの失業がきっかけとなって、貧困率が急激に増加した。それによって森林への負担は増大している。貧しい人びとは森をよく訪れるようになった。松の実などの堅果、木イチゴなどの漿果、薬草、鹿の枝角などを採集するために、森へ分け入り、また現金収入を得る目的のために枝を集めに森へおもむく。このように、たえまなく人間が干渉することによって火災発生の確率は増し、森林はダメージを受け、荒廃する。それに加えて、移動してきた牧民による都市周辺の家畜数の増加が、土地の急激な疲弊と、現地の遊牧民と新しく来た遊牧民とのあいだの対立を生んでいる。このような家畜密度の高さは、森林地帯をも放牧地として使うことを促し、

家畜が自然の再生分と植林の両方の若木を食べてしまうこととなり、結果的に森林破壊の一因ともなっている。

また、近年では土地の私有化を念頭においた囲いの建設も無視できない勢いで拡がっている。比較的裕福な層が、別荘などを建設する目的で、不当にも多くの木材を伐採している。したがって、貧者だけが森林破壊の要因となっているわけではない。

モンゴルにおける鉱業は、明らかに森林破壊の原因の一つである。外貨の稼ぎ頭として鉱産資源は注目されており、実際に国の予算も鉱産物の輸出に依存し、加えて地方政府の予算も領域内で操業する採掘会社に固定的に依存している。これらの活動が環境に及ぼす影響については情報がまったく欠落しており、国と地方の双方のレベルにおいて、鉱業によって引き起こされる実際の環境面のコストを算出することができない。

もう一つの森林破壊の直接的な重要な要素は、木材の国際貿易である。社会主義時代のモンゴルはソビエト連邦へ木材を輸出していたが、この貿易の実態は明らかではない。Ahlback 氏が述べているように、木材の年間輸出は八〇年代中頃にピークを迎え、その後、減少しはじめ、一九九五年には年間ピーク時の半分以下にまで減った。[10] それに代わって、九〇年代はじめからは中国が材木製品の唯一の貿易相手国になった。

一九九五年に丸太の輸出禁止令が導入され、総材木輸出の激減をまねいた。この輸出禁

止の目的は、第一に保護政策を強化することであり、また同時に、一部には国内の工場において付加価値のある生産を促すことでもあった。ところが、森林破壊率は一九九五年の〇・七％から、一九九八年には九％に達し、二〇〇〇年の六・五％にまで増大してしまった。これはじつのところ一九九六年と一九九七年の火災による惨状の結果だった。

それでもなお、加工された木材と木材輸出に関するデータの不一致からAhlback氏が発見したように、木材の密輸が行われているようである。[11] 密輸は、モンゴルの多少堕落した税関業務の状態において、可能性として大いにありうる。このような森林の枯渇と並行して、総伐採量中、輸出の割合も増加している。

このような違法行為に対する緊急の対応を目的に、政府は一九九九年に木材の輸出に高い関税を課した。森林管理センター長であるエンフサイハン氏によれば、木材の輸出は完全に止められた、という。

4　今後の取り組みについて

モンゴルは伝統的に、寒冷期には暖房のための燃料を必要とし、また木造建築を行うために大量に木材を消費する。遊牧は広大な面積を念頭に行われるため、人口密度はけっし

て多くはなかったが、社会主義時代とともに都市が肥大化し、人口密度が全体として高くなり、大量に木材を消費する国となった。

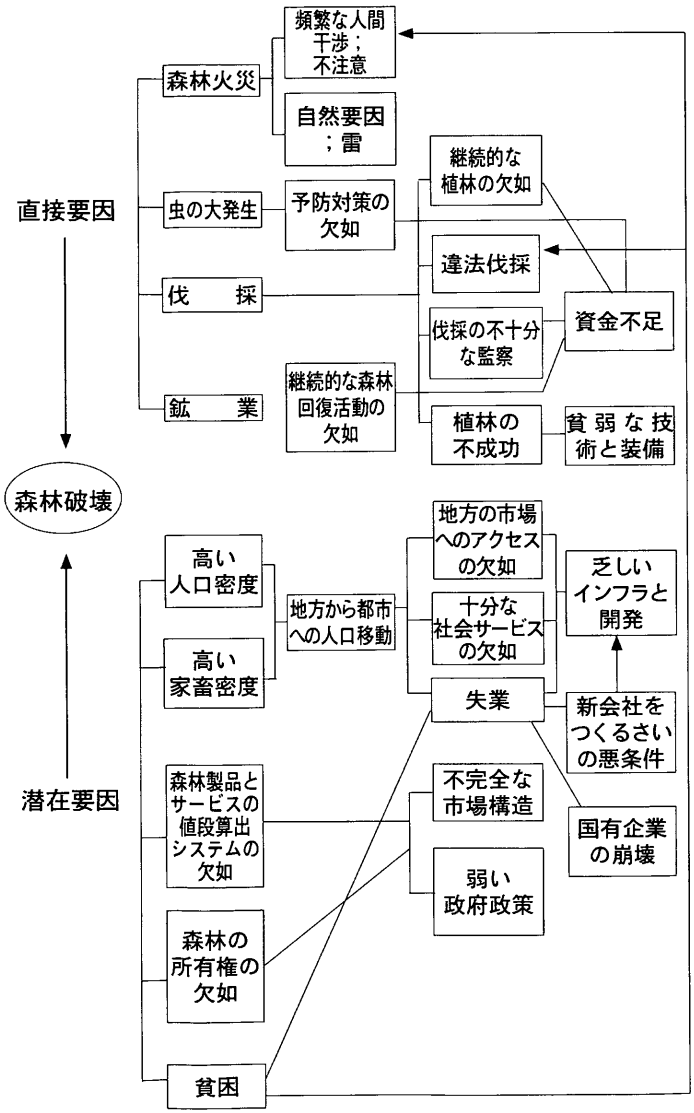
一方、モンゴルの地理的な位置は、森林に対して、商業的な価値よりもむしろ生態学的な価値を与えている。というのは、モンゴルで起きている森林破壊は、ほかの北東アジアの国にも大きな悪影響を及ぼすのである。このままでは、三〇年後には現在の森林の二〇%しか残らなくなり、大量の二酸化炭素の吸収タンク、言いかえれば酸素の供給源としての意味が減少し、地域全体での相当な気候変動が生じるだろう。

したがって、モンゴルの森林を持続可能な利用の促進とともに保全することが、生態学的に非常に重要なのである。

モンゴルにおける森林破壊は、先に述べたように相互に作用する要素の複合結果とみられる（図3）。人間によって引き起こされている直接的および潜在的な諸要因の複合的な結果として、森林破壊は進行する。諸要因の多くは、市場のひずみと市場の不完全さに対し、もともと適切に介在するための有効な制度を政府は往々にしてもっていないという、移行経済期の特徴に根ざしている。

先に明示したように、森林管理の分野それ自体において、おびただしい非能率が存在する。モンゴルの森林資源を持続可能なかたちで管理することは、社会全体にとっての最終

図３　森林破壊を引き起こす直接的・潜在的要因



的な恩恵を最大化することでもある。しかしながら、限られた予算、専門家の不足、旧式の技術と装備、所有制度の欠陥、意識の不足等のために（図3）、モンゴルにおける森林セクターは、相当な材木と非材木資源の双方を無駄に消費し、衰退させている。

環境面で健全で、経済的に有効な森林管理のための市場メカニズムをもたらすためには、森林の所有権と財産権の解決がまず不可欠である、と筆者は思う。

次に、図3に示したように、さらなる森林の荒廃を防ぐためには、人口増加、人口移動、失業、貧困といった広範な社会的、経済的な諸要因が適切に処理されなければならない。これらの森林破壊の諸要因のなかでも、とくに森林を荒廃させる火災と、継続的な需要のある燃料利用は、広がりと重大性という点から、もっとも早急な対応を必要とするものである。

燃料利用の面については、新しい燃料が求められるべきである。エネルギー効率のよい新しい技術のストーブや、太陽光発電および風力発電などの再生可能エネルギーの利用などが、結果的に森林資源の衰退を防ぐことになるだろう。

たとえば、「モンゴルにおける超断熱建築の商業化」プロジェクトが、ノルウェー政府と世界環境基金の支援によって実施された。経済的な資材として超断熱のストローバイル方式の建築物が導入された。エネルギーの節約という点から、太陽光や風力を利用する小

型発電機の輸入の実践は、政府によって奨励されるべきである。一九九九年の環境統計によれば、一年三六五日のうち二五〇日が晴れで、九～二三日間が曇りであるため、太陽光発電にはきわめて適している。

厳密な森林の所有権をつくりだすためには、経験を積んだコミュニティもしくは企業に所有権があるべきだと考える。すでに、選定された二つの県でコミュニティによる森林管理を確立するために、UNDP（国連開発計画）の資金によるプロジェクトが実施された。しかしながら、実施のさいに生じたいくつかのまちがいのために、実質的には失敗した。[12] 目先の利益にくらんで過度な伐採を行わないようにするためには、選定基準が入念に開発されなければならず、適切な戦略が徹底的につくられるべきである。すなわち、所有者の経済的活動と、政府やほかのコミュニティ組織の生態学的な管理は、調和されなければならない。

以上にみてきたような、モンゴルにおける森林破壊の要因は、モンゴルの近代化と密接に関係している。人口増加や都市化こそは森林資源に大きな影響を与えている一方で、牧畜業や農業の部門の要因は、それほど深刻ではない。

また、民主化以降の、市場経済への移行がスムーズに行われていないことを強く反映している。

モンゴルのような非熱帯地域の発展途上国にとって、気候変動は急激に森林破壊をもたらす。中国、とりわけ北東地域、ロシア、とくにシベリア、極東地域、中央アジア諸国といった非熱帯地域の発展途上国の実態とともに、今後さらに検証されなければならない。

持続可能な森林管理のための当面の優先事項としては、燃料木材に対する過剰な需要と、破壊的な森林火災に対して早急な対策をとることが重要である。あえて極端に単純化するならば、木材需要の軽減と、火災後の植林が重要である。

最後に、これら二つの課題のための私見を述べておきたい。

太陽光や風力などの代替エネルギーの利用を奨励する。モンゴルでは、費用もかからず、ふんだんにある太陽光と風力をエネルギーとして利用する新しい技術の応用を促進すべきである。

モンゴルの気候条件に適合する森林再生のための効果的な方法を開発するために、調査機関を動員し、支援する。また、森林再生活動にかかわる法人に、市場上の誘因を提供すべきである。

さらに、火災予防も同時に必要であるため、とくに火災が発生しやすい春期や乾燥期には、マスメディア、すべての教育機関、環境ＮＧＯを通じて、森林ステップ地帯に住む人びとの環境意識を高める。環境への負荷や損害に対する人びとの法的な意識を向上させる。

また、違法伐採と森林への火災による損害に対して、コミュニティの環境運動を奨励すべきである。

[注]

(1) Krause, Rieger, Kamal, 1998.
(2) MNE & UNDP, 1998.
(3) Krause, Rieger, Kamal, 1998.
(4) Munhtuya, 2002.
(5) JICA & MNE, 1998.
(6) ウネン紙、二〇〇二年二月七日。
(7) Forestry & Wildlife Bureau, 2000.
(8) World Vision International-Mongolia, 1997.
(9) Forestry & Wildlife Bureau, 2000.
(10) MNE & Wildlife Bureau, 2000.
(11) MNE & Wildlife Bureau, 2000.
(12) MNE & Forestry and Wildlife Bureau, 2000: 47–62.

Column 5

モンゴル買いもの事情

斎藤美代子

モンゴルでは時間はゆったり流れる。草原を動く羊たちを眺めていると、そういう感覚が当然のように湧いてくる。都市であるウランバートルですら、日本に比べると、時間の流れはおだやかな気がする。

「モンゴル時間」という言葉を、よく日本人観光客が口にしているのを耳にする。彼らはガイドや通訳から、モンゴルでは時間どおりに物事が進まない言い訳として聞かされているようである。モンゴルでは午前と午後しかない、と言ったりもする。しかし、いまのウランバートルではそれはちがう。何時に、と約束をして、ちゃんとその時間に会って仕事を進めることのできる人が増えている。時間をどうとらえるかはその人しだい、信用のできる、仕事のできる人は時間を守る、というように変化が訪れているのである。

そんななか、もっとも時間を取られる作業がある。それは「お買いもの」である。日本でならば一カ所でほぼすべての食材をそろえることが可能であり、〇〇をしたあとに買いものをして、と予定を立てることができる。ここではそうはいかない。

買いものをリストアップする。そして当日は「買いものの日」であり、それ以外の用事は入れない。リストに従って、どのルートでまわるのが効率的かを考える。

ある日の買いものを例にあげてみる。その日のリストは米、パン、ハム、トマト、キュウリ、タマネギ、ジャガイモ、鶏肉、果物。日本でならば一つのスーパーですべて買うことができるものである。

これらを買うために、わが家では四カ所をまわる。米は日中合弁米という、ここで売られているなかではまだおいしいものを買うため、それを売っているだろう大きめのスーパーに行く必要がある。大きめのスーパーだから、リストのその他のものも売ってはいるのだが、そういうところは値段が高く、鮮度が悪い。そのため、野菜類や果物は駅の近くのバルスというザハ（市場）に行くことになる。そこは駅の近くだけあって、輸入品の果物やセレンゲ県でつくられた野菜など、安く新しいものが売られているからである。瓶詰め類などロシア産のものも手に入る。ここはいいものがあるのだが、中は人でごったがえしており、スリに気をつけ、ぶつかってくるがっしりしたモンゴル人をかわしながら進んでいくことになるため、歩くだけでかなりのストレスとなる。

肉はモンゴル人がもっとも消費するものの一つなので、町なかでも売っている。とくに羊と牛に関しては、まちの小さな店でも買うことができる。しかし、豚肉と鶏肉はそうはいかない。これは外国人がよく行く食品ザハでなければないのである。これらのものを見つけ、値段を考

え、買う。肉はキロ単位で買うため、荷物は重くなる。この日は一一時に家を出て、四時すぎに家にもどった。そのあとも肉を切り分ける作業が待っている…。

このようにモンゴルでは、こちらが求めているもの、それもできるだけ新鮮でよいものを仕入れるためには、日本にいる以上の努力と時間が求められる。それは流通システムがまだ確立されていないことが原因なのだろう。

米のところで書いたが、米は「売っているだろう」というところを想定して行く必要がある。あるときは売っていても、次には売っていない可能性があるからだ。夏の時期なら、行って売っていなかったとしても、ちがうところに行く元気がある。冬のマイナス二〇℃のなか、意を決して米を買いに行って、なかったときの落胆は計り知れない。知人のモンゴル人にそれを話しても「なぜそんなに米にこだわる？」と言われて、日本人にとっての米の重要性を語ることになり、問題はちがう方に流れていってしまう。私としては、品物がなくなっても補充されるシステムがないことが問題のように思うのだが。

モンゴルでは民主化直後、ものがまったくなくなったという。社会主義圏が崩壊してしまったため、コメコン諸国からのものがストップしたからである。そのときにナイマーチンと呼ばれる人々が商品を買いにロシアや中国に行き、担げるだけ担いで持ってきたものを売って商売をしていた。彼らの商品は担いできたものがすべてであり、売ってしまえば終わり、〝売り切り御免〟の商売なのである。現在はありとあらゆるものが入ってきて、当時のようなもの不足

の状況ではない。しかし、買い手からすれば、その場で買わなければ次はないかもしれない、という状況はまだまだ変わっていない。ある商品を見て、それが自分にとって必要かどうか、値段はどうか、買って後悔しないか。出会ったときにそれらの判断を迫られる。日本でならば、まあいいか、と思って買ってしまい、あとでまったく使わないということがあるが、ここではそういうことはありえない。瞬時の判断ではあるが、真剣にそのものと自分を考えるからである。そして、自分にとって必要だ、ほしい！、という強い思いの末に手にしたものをあとで使わないなどということはありえないのである。

ものを手にするときのこのような感情は、日本では忘れてしまったものであった。それは、小さいころのほしかったものを手に入れたときのうれしさや、それをずっと大切に使っていたことを思い起こさせるものである。クマのぬいぐるみと日常品とのちがいはあるが、ものを手に入れる喜びを、ここでは日常的に味わうことができる。それはつまり、ものにとっての幸せな時間がまだモンゴルでは流れている、ということなのかもしれない。

Column 6

モンゴルゴミ事情

斎藤美代子

ゴミ、ゴミ、ゴミ……。

私はモンゴルが好きでここにいる。モンゴル人も好き……なはずである。しかし、暮らしていると、ときおり大声で言いたいことがでてくる。たとえば「ゴミを捨てるな！　つばを吐くな！」と。つばは乾燥している気候なので、そのうち乾くだろうが、ゴミは消えない。ウランバートルは町中ゴミだらけである。

景観を害するだけではない。健康にも深刻な影響があると思われる。この夏、地方に行ってウランバートルにもどってくると、街の上空は霞がかかったように白く曇っていた。異常な暑さや人々の不注意から出た山火事の煙、車の排気ガス。それに加えて生活から出る煙、とくに人々はゴミを焼く。ペットボトルでもなんでも燃料と思っている。その煙から大気は汚れ、突き抜ける青い空はなくなってしまっていた。それを毎日吸っているとどうなるのだろう……。

ゴミの散乱はウランバートルだけではない。草原を車で走っていても、道の脇には投げ捨てられたゴミが目につくようになった。アルヒという酒の瓶、ビニール袋、ペットボトル……。都会も草原も関係なくゴミは散乱している。い

まや人のいるところゴミあり、である。遊牧民のお年寄りはため息をつき、首を振るばかりである。

モンゴル人のなかにも、これらの状況は困ったものだという認識はあるようだ。ウランバートル市ではゴミをなくそう運動を試みたり、地区ごとにゴミ清掃を呼びかけたりもしている。またUBSというテレビ局のニュースは「ここにこんなにゴミが捨てられています！　ここは○○地区××という場所で……」と具体的に地名をあげて放送する。次の日、そこにはゴミはない。人々が恥ずかしがって掃除するという。

そういう活動がなされたとしても、ゴミはいっこうに減らない。以前はこれほどではなかった。ものの増加がゴミの量の増加と比例しているように思う。三年前、ジャガイモやにんじんを買うときにはビニール袋には入れてくれなかった。ペットボトルや缶入りのジュースもなかった。人々のゴミといえば生ゴミが主だった。いまでは燃えないゴミの方が多いかもしれない。

モンゴルでは分別収集などなく、すべてのものがいっしょに捨てられる。ゴミ収集車もいつ来るのかよくわからないので、ゴミ捨て場には常時ゴミがたまっている。それらが風に吹かれて散らばり、まわりはゴミだらけである。収集されたゴミは市内から少し離れた谷間に運ばれ、捨てられる。そこは一面草原だったはずだが、いまでは一面ゴミしかない。ゴミからはいろいろな有害物質も垂れ流しになっている。市の計画では、ドイツの援助でゴミ焼却施設をつくるらしいが、それまでにこの一帯はどうなってしまうのだろう。

昔、遊牧民たちは移動をするたびに、いままでいた場所を清め、馬をつなぐ杭の穴もすべて埋めて移動していたという。また、山や地の神をまつるところであるオボーはとくにきれいにしていた。いまでは祈りをささげるのか、宴会をするのかわかっていない人々が多く訪れるようになり、ゴミや瓶を捨てていく。オトゴンテンゲル山という昔から信仰を集めてきた山は、最近立ち入り禁止令が出された。人が入り、汚れたり火事が起こったりするからだ。

モンゴルの自然は美しい。だれもいない大地で風を受けて立つとき、身ぶるいさえ起こる。身近にこのようなものがあるなんて、自然から遠く暮らしていた私にはうらやましいかぎりであった。しかし、ゴミを捨てる人は行為のよし悪しなどは考えない。また次々と便利なものを持ち込み、急激な経済発展を望む人々は、自然が一度壊れてしまったら、けっして元にはもどらないということを考えることなどない。彼らがめざすのは「日本のように」発展すること、なのだから。

テレルジというウランバートルの近くの自然保護地区に住む遊牧民はつぶやいた。「昔はそれはきれいだった。いまは春に私たちがゴミ拾いをするようになってしまった。一生懸命片づけたのに、夏が終わるとまたこんなに……。不注意からくる火事も多かったよ。これからどうなるんだろう」と。

彼の不安は、人間が自然の一部であり、自然とともに生きてきたという誇るべき歴史を、自然への謙虚さや畏怖をゴミとともに捨て去ってしまったモンゴルの未来への不安でもある。

Column 7

モンゴル不動産事情

斎藤美代子

モンゴルに行くと決め、まわりの人に伝えたとき、ほとんどの人の第一声は「どこに住むの？　あのテントみたいなの？」であった。モンゴルと聞くとゲルに住み、馬に乗って学校に通うものだと思っていた人もいたくらいだった。

首都ウランバートルでは残念ながら馬を飼うのは難しい。九階建ての建物が建ち並び、車は多く、朝夕はラッシュになるくらいの都会である。

二〇〇一年度の統計によれば、総人口二四〇万人のうち七六万人がウランバートルに暮らしていることになっている。しかし、実際にはもっと多く、一〇〇万人くらいいるはずだという。周辺地域に移動してきて、登録をせずにゲルで暮らす人々は日々増え続けている。

これだけ人口が集中すると当然、住宅は不足する。最近では新しいビジネスとしてマンション建築が進んでいるが、手抜き工事や不適切な場所への建設などちがう問題を引き起こしているらしい。また、新築が建ったとしても値段が高く、なかなか買えるものではない。そこで、ほとんどの人々が暮らすのは社会主義時代に建てられた建物ということになる。

私は一年半前に部屋を買った。部屋選び、不動産売買のやり方があまりにも日本とちがい、とまどうことも多かった。では、どのように購入を進めるのか。

まず地域選びから始まる。日本でならば駅や学校に近いかどうか、買いものに便利か、などが主な基準になるが、ここではちがう。安全か、お湯がちゃんと出るかどうか、冬の部屋の寒さはどうか（暖房の効きがいいか）が主な基準となる。また最上階と一階は避けた方がいいとされる。最上階は寒く、春の雪解けには雨漏りする可能性があり、一階は泥棒が入りやすいためである。また九階建ての高い階は、エレベーターが止まることも多く、あまり好まれない。部屋の向きも問題である。西・北に窓がある部屋は寒い。冬や春の風はこの方向から吹くためである。

これらの条件を考慮したところで、新聞を買いに行く。「ザル・メデー」というありとあらゆる売りものが載っている新聞から物件を探すのである。モンゴルに不動産屋はない。新聞には何部屋、どこの地区、どういう状態か、などが書かれている。たとえば「四地区、最高の修理をした、電話・ケーブルテレビ付きの三部屋売ります。電話〇〇××」というような具合である。値段はほとんど書かれていないので、電話をかけて交渉することになる。新聞に自宅や個人の携帯の電話番号を載せるというのも驚くべきことだが、ここでは当然である。

電話で値段や部屋の状態など聞きたいことを聞いたあと、直接見に行くことになる。まったく知らない人の家に突然、行くわけである。見

に行き、気に入ったとしても、そこで即決してはいけないらしい。ここが壊れているだの、なんだのと言い、値切りに入る。そして何度か話し合ったすえ、合意すれば売買となる。また、部屋の権利書の確認も忘れてはいけない。名義が一人でない場合、ほかの兄弟の合意なしに売ろうとし、あとでもめることが多いからである。権利書を質屋に入れてしまっている人も多く、権利書の名義を書き換えるまでお金を払ってはいけない。権利書の名義変更後、お金を払う。個人売買である以上、ローンなどなく、即金払いである。人を信じてはいけない、だまされた方が悪いという駆け引きが続くため、神経はすり減る。権利書を手にしたあと、すぐに扉を付け替え、落ち着くにはしばらくかかる。

家を買って引っ越しするというと、なんてたいへんな仕事だろうと思ってしまう。ところがまわりのモンゴル人たちは、それほど気にしていないようなのである。私の住む建物には六軒の家がある。私たちが入ってから一年半のあいだに三軒が入れ替わった。そのときの引っ越し作業の早さは驚くほどであった。エレベーターもないのにあっと言う間に荷物が運び出され、出て行ってしまった。さすが遊牧民族……と思うような早わざである。

彼らにはどうやら移動することへの抵抗感がないように思われる。また、この移動には季節があるらしく、見ていると春と秋の入れ替わりが多い。日本ならば年度替わりという理由が考えられるが、モンゴルでは少々事情がちがうらしい。

モンゴルのもっとも大きな年中行事はツァガー

ン・サルと呼ばれる旧正月である。ごちそうを準備し、来た人々に振る舞う。年長者のいる家には一家であいさつに訪れる。訪問する側もされる側も大きな出費である。盛大なお祝いのツケが春には待っていることになる。そして、とにかく持っていて売れるもの、家を売ってしまえ、ということになる。暖かくなると建物を出て郊外の小屋で暮らしても大丈夫というわけで、春は家を売る人が増え、値段が下がる。秋は逆にこれから寒くなるので建物で暮らしたいという人が増え、値段が上がる。春と秋にはこのように不動産が動くことになる。

「不動産」が動く。モンゴルでは不動産という感覚が住居にはあてはまらない。モンゴルのすまいはまるで「動産」である。それは長い年月、草原を移動してきた歴史をもつ彼らの家屋への認識が、われわれとはちがうということにほかならない。売ったらまた買えばいい、そのうち手に入るさ、というような感覚。どこででも暮らしていくたくましさ。数時間で家財道具をまとめ、トラックの荷台に人もろとも積まれて出ていく彼らの後ろ姿は、家へのしがらみ、土地神話などを吹っ飛ばしてしまうような潔さすら感じられるものである。